

---

# 黒箱配達人

浜田色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒箱配達人

### 【NZコード】

N3571P

### 【作者名】

浜田色

### 【あらすじ】

黒箱を届ける配達人と、送る人、受け取る人の話。

## 黒箱配達人（前書き）

全部で5話の予定です。

## 黒箱配達人

高志は、とても貧乏だった。

今日も、実家からの仕送りを待つている。時計を見つめ、今か今かとインターホンの鳴る音を聞き漏らさないよう、テレビもつけないでいるのだつた。

ただ、電気代の節約なのがだが、

「きたあ。」

高志の細く痩せた指がドアノブに手をかけると、いつもとは少し違つた制服をきた配達人が箱をもつて立つていた。

「林高志さんですね。お届け者です。」

「待つてましたっ。」

玄関に用意していた印鑑を、受取書に押す。

「ご苦労様です。」

笑顔で箱を受け取ると、その空氣のよつた軽さに首をかしげた。

「あの、すいません。」

「なんか、荷物おかしいですか。」と、立ち去りつとしていた配達人が、面倒臭そうに戻つてきた。

「これ、実家からだと思つんですけど。中身、すごく軽くて。いつも米とか入つてるんです。」

「米?」

「ああつ。ほら、これ宛名がない。間違つた人の荷物じゃないですかねえ。確認してもらえますか。」

配達人の眉間に皺が入つた。

「お客さん。」

とんとん。と、箱を指差す。

「箱、見てくださいよ。」

「いや、そりやあ、いつもより箱が立派つて言うか・・・ていうか黒いですけど。実家以外こんな大きな荷物は送つてこないから。」

同じように、配達人も首をかしげた。

「お密さん。あなた、もしかして貰つた事が無いんですか。これ。

「どうぞ、うりとですか。」

「へええ。珍しいこいつぢや。」

まるで珍獸でも見るかのよつた顔つきで、高志は見られている。  
「とにかく、これは僕に送られたものでは無いと思ひます。持つて帰つてください。」

「それは、困ります。」

配達人が、力いっぱい箱を押し当てた。

「これは貴方に送られた呪いですから。」

「のろい・・・つて。」

「一応いつときますけど動きの遅いことではありませんよ。文字通り『呪い』です。貴方は誰かに呪われたんですね。なんか、恨みでも買わはつたんと違いますか。」

途端に、黒い箱が重くなつた気がした。

「では、他にも届けないといけない家がありますので。」  
「配達人を、高志は必死に自宅に引き込んだ。

「お・・・お願ひします。説明してください。」

「そんな、困ります。実家のお母さんに聞かはつたりよろしくやん。」

「でも。呪いをもらつたなんて、親にどう言つたらいいんですか。」

「ふつーの事ですよ。アンタが可笑しいんや。大学生くらいの年になれば、一つや二つは受け取つたことはあるじ。俺やつて、アンタぐらいの歳のころには十個は貰つてたし。」

「じゅ・・・十個。」

「自分で言つのも恥ずかしいけど、モテてん。俺。」

「この箱はどう処分すればいいんですか。」

「燃えるごとにでも出したらいいんです。あ、この地区やつたら

資源ごみかなあ。

「お祓いとか、いるないですよね。」

「呪い、つていうてもホンマに呪われる訳とちやいますから大丈夫とちやいますか。でも、あとで死んでも文句とか裁判で訴えたりしたかて会社は責任を負いませんからね・・・つて、ちょっと、アンタなあ俺の事をひき止めたいたんやつたら茶でもだしたらどないやねん。」

高志はあわてて埃が被っていたが上等な煎茶の入った缶を掴み粗末な湯飲みでそれをわたした。

「すいません。すいません。僕、田舎者で都会の事は何も知らないんです。」

「ふうん。」

高志は、なんとなく配達人の偉そうな態度に苛立ちを感じながらも、箱のことが怖くて他には頼れる人がいないのを一生懸命に顔で表現してみせた。

配達人は、「いっぽうどー」のお茶はやっぱおいしいなあ、と呟きながらずすずすと茶をすすつた。

「兄ちゃん大学生やんな。」

「はい、T大の一回生です。」

「あそ。じゃあ、その賢い頭に叩き込んでさ。この国で唯一許されている『人を傷つける』方法をな。」

「人を傷つける・・・。」

「そう、この国は知つての通りストレスで溢れかえつてる。仕事、対人関係、男女関係、金の問題、隣のオバハンが飼つてるアホ犬がめっちゃ吼えてきてイライラするとか・・・あ、ゴメン俺の話になつてたわ。まあ、その他いろいろな。今の若者はストレスを抱え込んでしまうんか知らんけど、毎日あきれくくらい誰かが自殺してるんは新聞とかで読んだことあるや。」

「あなたたって、その若者じゃないですか。」

「え。そう、ありがとづ。アンタええ子やなあ。」

「えへへ。」

「まあ、政府も始めはただエライ事やなあつてテレビで言つてるだけやつてんけどな。年間三万人以上の自殺者がこの十年の間に出来るようになった。割り算してみ、一日八十人つてことやん。自殺だけやない、うつ病みたいな心の病を抱える人間も増えた。個人個人の問題じやなくてな、国家を動かすくらいの問題になつてもーたらや。議員さんもニュースでべらべら喋つてるだけじゃどうにもならんからな、『しゃーない、ほつといたら国民がやいやい言い出すしそ困つたなあ。あ、そーや、ストレスのはけ口を作つたらどうやる』つてことで、ある機関を作つた。」

配達人は、『そそそとポケットから名刺を取り出した。

「黒箱配達人の黒崎と申します。どうぞ御用があればお電話ください。」

高志は名刺を受け取つた。名刺には『黒箱配達局』の下に『配達人 黒崎恵吾』とだけ記されてある。

「あの黒崎さん。」

「ん?」

「そのままの名前なんですね。会社名。」

「国の機関なんやから、捻つた名前よりもわかりやすい名前の方が覚えやすいやんか。それに俺に言われても、困るわ。」

高志は玄関に置いたまま、黒い箱を見つめた。見れば見るほど、氣味が悪くなつていく気がした。

「気持ち悪い箱やろ。でもな、あれはただの黒く塗つてある段ボール箱やねん。嫌いな人間、恨みを持つている相手、本音を言いたいけど言えないのがこの社会。俺たちはこの箱をそういう相手に送りつけるのが仕事やねん。この箱は、自分の住所も送り主の住所も書いてないから貰つても仕返し出来ないようになつてる。貰つた人間はただ、受け取るしかない。そういう箱や。」

「中身は。」

「中は何にも入ってない。さっき持ったとき軽かつたやろ。入つてるとしたら、箱を送った人間の気持ちくらいかなあ。」

「僕、誰かに嫌われてるんですね。」

「兄ちゃん元気だしや。」

「でも、すぐには立ち直れないです。こんなのが、気分が悪い。」

「深く考えない事やな、こんなん言つてもしゃあないかもしれんけど、『黒箱』が出来てから自殺者はぐんと減つた。精神科が流行らなくなつて病院を閉めだしたくらいや。もしかしたら、この箱を送つた事によつてその人は死ぬのを止めたかもしらんし。」

「勝手なこと言わないで下さいよ。貰うほうの気持ちはどうなるんです。こんな事するぐらいなら、僕に直接文句言いに来ればいいじゃないか。」

配達人は高志の肩を軽く叩いた。

「それが人間つてもんやんか。」

高志は、腹が立つってきた。と同時に怖くなつてきた。今まで誰かに嫌われたり憎まれた覚えは一度も無い。だけど、自分がそう思つてゐるだけで、本当は違うかつたのかも知れない。いつも二二二二二笑つている大学の友人が、心中ではどんな思いをもつて自分と話しているのか、考えただけで恐ろしくなつてきた。いや、もしかしたらバイト仲間かも知れない。まさか家族・・・

「僕は、今まで人に嫌われないよう、生きてきたつて自身があつたのに。」

配達人は、「『兄ちゃん』とこうど、高志に手を振つて「ほな」と言つた。

「帰っちゃうんですか。」

今にも泣き出しそうな高志をよそに、配達人は二二二二二と笑つてゐる。

「良かつたやないですか。全ての人にはかれる人間なんてあります。箱をもらつた事無いつてことは、ちょっとオタクの人生薄つ

「へらやつたんかもしれないですよ。」

ドアノブを回す音の前に、配達人は小さくゲップした。

「では、いつでも、ご連絡お待ちしております。」

## 黒箱立会人

暗闇の林の中を抜けると、いつもそこには和樹が立っている。私は持っていた鞄の中から、果物ナイフを取り出して彼に突き刺す。

腹 腹 腹 首 胸 腹

気づいた頃には私は真っ赤に染まつて

「うわわわわ。」

同じ夢をもう一週間は見続けている。

額の汗を拭つてカーテンを開けた。

いつもと同じ朝の光が、顔を照らして熱くなる。

「私、意外と諦めの悪い女だったんだあ。」

溜息と共に、涙がこぼれた。

一ヶ月前、突然『別れよう』と和樹に切り出されたときは、

「そう、わかった。元気でね。」

と、淡々と言葉が出たと言うのに。

のそのそとベットから降りて、洗面台で、赤くなつた瞼に水をあてる。

ふと目じりに皺が出来ている事に今気づいた。

わかってる、もう三十を越えている。

和樹と結婚できると思ってたのに。

また、目頭が熱くなる。

「もう、いい加減にしてよ。こんな顔じゃ、仕事にいけないじゃ  
ない。」

「ばしゃばしゃと顔を洗う。

「うひうひうひ。

だめだ、今日は会社にいけない。

明美があんな事を言うからだ。

「和樹君、女人の人と一緒に住んでるみたいよ。

想像するだけで、怒りと憎しみとが波のように押し寄せでは、哀  
しみになつてかえつてくる繰り返しだった。

「・・・死にたい。」

和樹が他の女といるなんて、まさか浮気してゐるなんて思いもして  
いなかつた。別れを切り出されたのも、私が仕事で忙しくて会えな  
い日が続いてたからだと思つていた。でもそうじゃなかつた、和樹  
は私以外に好きな人が出来たんだ。

「私が、悪かつたのかな。」

とりあえず、会社に電話しよひ。今まで有休もほとんどいらなか  
つたんだし、一日くらい大丈夫だろひ。それに、今会社に行つても  
多分何も出来ない、泣き喚くだけだらうな。

会社に休みを伝えると、再び布団のなかに潜つた。

どれくらい経つただろう、インターほんの音が聞こえる。  
明美が心配して来てくれたのだ。

「ちよつと、大丈夫？ 彼氏にふられたくらいで休みとらないでよ。  
私にしわ寄せが来るんだからあ。」

「ゴメンね。」

明美は、会社の同期で同じ独身仲間だ。明美は私の悩みを、いつ  
も冗談半分に優しく聞いてくれる。彼女のおかげで今までやつてこ  
れたと言つても嘘じやない、それくらい明美に私は頼つてしまつて

いる。

「いいよ、私たち友達じゃない。」

彼女が笑うときは、口が漢字の一文字に伸びて、一緒に口元のほくろが横に動く。それがなんとも色っぽくて、羨ましいなあと思ったことが、何度かあった。

「ありがとう。」

腫らした瞼にあてるよつにと、明美が蒸しタオルを用意してくれていた。鼻をかんでそれを受け取ると、また涙が出てきた。

「うそ、また泣くの。」

「好きで出るんじゃないのよ。涙腺が緩んじゃって。」

「レンタル店で、フランダースの犬でも借りてこようか?」

「やめて、部屋が水没するから。」

こんなときも、明美は「女らしい女ね。」なんて馬鹿にしたりしない。

彼女は優しく、母親のように抱きしめてくれた。

「困ったわね。」

明美的細い眉が真ん中に寄つた。

「だつて、原因は和樹君なんでしょう。」

「・・・他に何もないもの。」

「あなたたち、学生時代から付き合つてたんですけど。だから、十年ちょっとか。早く結婚すればよかつたのよ。和樹君はずつと望んでたのに、あんたが仕事したいからつてゴネて先延ばしにしてたんじゃない。」

「でも、いつかするつて思つてたのよ。ううん、まだ好きだし、

私は。」

「困った子ね。」

まるで、駄々をこねた子供を叱つているようだ。

「私だって、今更だつてわかってる。諦めが悪いつてのもわかつてるし、自分でも恥ずかしいと思つてる。可笑いでしょ、明美。笑いたかつたら笑つても良いのよ。でも、頭がおかしくなりそうな

の、それくらい・・・つらいの。」

「わかつた、わかつたから。涙とか、鼻水とか拭いて。」

私は、明美にあの悪夢の事を話した。いつか本当に和樹の家に押し入つて一緒に住んでいるらしい女共々、殺してしまつんじやないか。

「あんたは、もつと和樹君の前で泣いたり喚いたりして抵抗すればよかつたのよ。知らない? そんな歌流行つてたよね。大人ぶつちやつるけど本当はすつごい我慢してて・・・馬鹿じゃない。だから夢に出てくるのよ。」

たしかに、そうかもしけないと思った。

いつ頃からだろう。誰にも本当の気持ちを言わなくなつたのは。いや、言えなくなつたが正しいかもしけない。

年齢とか、女だからとか、変なプライドで本当の事を言つのが怖くなつたのだ。

だから、和樹に本当の気持ちを言えなかつたんだ。

「ああ。」

「溜息つきたいのは私のほうよ。」

明美はいつの間にか、そばにおいてあつた柿ピーをつまんでいる。

「そうだ、和樹君に黒箱を送るつているのはどう。」

「え、そんなの・・・私だつてばれちゃうよ。」

「いいのよ、ばれたつて。怒つて電話でもしてきたらこいつのもんよ。あんたが言いたい事を言つきっかけにでもすればいいのよ。一発殴つて見なさいよ。きっと見た事無い顔するわよ。」

意地悪そうに笑う明美の顔は、やつぱり魅力的だった。

この友人を敵にだけは回したくないと思った。けど、送つてみてもいいかもしけない。

「じゃあ、電話しといて。私、箱を買つてくるから。」

気が早いなあと苦笑しながら、黒箱配達局に電話をかける。その時にはもう、涙は止まっていた。

「ほんにちはあ。黒箱配達人です。」

ドアを開けたのは、女だつた。

「えつと、倉谷和樹さんのご自宅で、お間違いないですよね。」

「ちよつとまつて。」

短く切りそろえられた髪が、軽くゆれた。

「ねえ和樹、来て。」

奥から、眼鏡をかけた男が出てきた。「みて」と女が黒箱を指差す。

「美奈子か。」

男が眉を寄せた。

「えらいこいつちゃ、これが曇ドラでよく見る修羅場つてやつやな。」と、少しテンションがあがるのをこらえて、がんばって無表情をつくつてみせた。

「倉谷和樹さん。こちらにサインをお願いします。」

「・・・・・。」

「和樹、サインしてって。」

女が男を突つついた。「う、うん。」と氣弱そうにボールペンを受け取る。今にも泣き出しそうだ。

「別にいいのよ。」

男の手が止まつた。子供のような顔をして女を見る。

「私は、別にいいって言つてるの。あなたが、彼女のところに戻つても怒つたりしないわ。」

「僕は。」

「だから、いいって。全部なかつた事にしてあげる。」

「あの、サイン。」が欲しいんですけど。

「「メン。」

男はボールペンを女に渡して、走つて階段を降りていつた。

「倉谷さん、サイン・・・。」

「私がするわ。本人じゃなくてもいいでしょ、あなたが黙つてい

ればいいんだから。」

そう言いながら、すらすらと駅の駅前でサインをする。

「男って馬鹿よね、ほんと子供みたい。」

そんな事を言われて、どうこう顔をすればいいのかわからなかつた。

「これでいい?」

につこりと笑った口元のほくろが、とても魅力的だ。

「いいんですけど、あなたはこれでいいんですか。」

「え? ああ、いいのよ。」

ちょっと、かつこよく髪でも搔き揚げて男前をアピールしてみる。

「俺やつたら、絶対あなたを選びますけどね。ま、お困りなら、こちらにご連絡下さい。別に私的なお電話も全然かまいません、ほら、名刺の裏に携帯の番号あるんで、いつでも暇してますから。」  
女は手に取った名刺を、ひょいと空に向かって飛ばした。

「いらないわ。」

まるで、母親に怒られたような気分になつて、早急にその場を立ち去ってしまった。

「パパ嫌い。」

まさか、この言葉を父親になつて4年目にして聞くなんて思いもしなかつた。もっと娘が年頃になつてから、高校の制服を着てちょっと色気づいてからだと思っていたのに。高校どころか、まだ娘は幼稚園に通っている。この前なんか「パパのお嫁さんになるの」ってはしゃいでいたのに、何でこうなつたんだろう。

「たばこ、吸いてえ。」

ハンドルに頭をもたれかけさせて、唇で禁煙パイプをくねくねさせる。

「仕事しなきゃ。」

とにかく、この禁断症状をどうにかしなければいけない。仕事に集中すれば、イライラも忘れられるかもしれない。車を降りて、荷物のチェックをしよう、そうだけだと忘れられる。

禁煙パイプをポケットに入れて、トラックの後ろの扉を開けた。中には白い箱が十箱ほど積まれている。今日は、まだ少ないほうだが、これから年末にかけてどんどん増えていく。

「えっと、佐々木さんね。」

一番手前あつた箱を手に取る、箱に書かれている住所を確認してカツターで箱を開ける。白い箱は、届ける住所や送り人の情報が書かれているので受け渡しに必要はない。要るのは、この箱の中にある、『真つ黒な箱』だけなのだから。

「佐々木信彦さんに。お届け物です。」  
古いアパートの、インターほんに話しかける。

「これ、壊れてんのか?」  
ドアをノックしようとすると、大家さんらしい女性が向こうから声をかけてきた。

「兄ちゃん、佐々木さんに用があるんだつたら無駄だよ。」「お留守ですか？」

「ううん。佐々木さん、家にいるんだけど出てこないんだよ。私も困ってるんだけどね、家賃滞納しちゃってるしさ。いや、払えないわけじゃないみたいなんだけどさ、なんか陰気臭い人でね。お兄ちゃん、合鍵を貸してあげるから、いつ家賃払ってくれるのか聞いてくれないかい。」「はあ・・・」

仕方なく、合鍵を受け取つて再びインター ホンを押してみる。当然、返事は無く「開けますよ」と一応断りを入れてドアを開けた。

真っ暗な部屋の中に、無数の箱が転がっていた。

「佐々木・・・さん?」

旅行から帰つてきた時のような独特の臭いが鼻に入つて気持ちが悪い。

目が暗闇に慣れてきた頃、ボンヤリと人影のようなものを確認する事が出来た。

「佐々木信彦さん、ですね。お届け物です。」

やつとの事で、電気のスイッチを押した。すると、佐々木信彦であらう男が前にベルトを巻いて箱の上に立つていたのだ。

「あんた、何やつてるんだつ。」

高校時代にアメフトをやっていて良かつたと、今ほど思ったことはない。

男が抵抗する間もなく、取り押さえられる事が出来た。

「どちらさんですかあ。」

空氣のよつな、弱弱しい声が聞こえた。

男は、佐々木信彦で間違いないようだ。

「お届け物です、せめて受け取つてから死んでください。」「こんなときに、またですか。」

「またつて。」

今更気づいたが、部屋においてある箱は、全て黒箱だった。これほどの量を見た事が無かつたので、思わず「うわっ」と言ってしまった。

「配達人でも、この量には驚きましたか。」「すいません。」

「いえ、いいんです。箱をためているのが悪かつたんでしょう。もう、捨てるのも面倒くさくなつて。」

少し生氣を取り戻したのか、さつきよりは声にハリが出てきた。「始めは仕方ないなって思つてたんです。」

「どうして。」

「社員にリストラ宣告をしていました。勤めていた会社員の三割を、解雇しました。」

三割が一体、どれくらいなのかはわからないが、多分結構な人数なんだろうな、と思つた。

「恐らく、箱を送つてきたのは解雇された人たちです。きっと次の仕事が見つからずに生活に困つているんでしょう。中には一家心中した会社員もいました。だから、私を恨むのも当然です。それだけの事をしたんだから。」

「でも、お仕事だつたんでしょう。」

佐々木は、薄い笑いを浮かべた。いや、ただの溜息だつたのかもしれない。

「私には妻も子供もいます。私が仕事をしなかつたら、一人とも暮らしていくない。だから、嫌嫌ながら社員の首を切りました。その結果が如何なんです。これです、この部屋が教えてくれるでしょう。皆に恨まれて会社になんか行けない、どんな顔をしていけばいいんです。会社を倒産から救つた仕分け人ですか。無理だ、もう死なせてください。」

今度は、そばにあつたビニール袋を頭にかぶせた佐々木を取り押さえた。

「じゃあ、せめてこの受取書にサインしてからにしてください。受取人が死んじゃってサインもらえなかつたら手続きが面倒くさいんです。お願ひしますよ。もう、止めませんから。」

これは、正直本心だつた。誰が自殺しようが関係ない。こんな陰気なところ、サインを貰えればすぐに立ち去りたい。あとは、大家さんが警察かなんかが処理してくれるだろう。目の前で死なれたら、自分が警察に行つて事情を説明しなければいけない。

早く家に帰りたいのに、イライラする。

「わかりました。」

氣の乗らない佐々木にサインさせる。よし、これで次の配達にいける。

「あの。」

「はい。」

佐々木が困つた顔をしている。

「もう、好きにしてもらつていいんですよ。」

「違うんです。この箱。」

自分が持つてきた黒箱を、揺すつっている。

力タカタ

音が鳴つた。

「何か入つてるんです。」

「そんなはずは。」

無いはずだ。黒箱に、物を入れてはいけない決まりになつてている。絶対に空で箱を閉めるように、配達人のチェックが入つてているはずだ。

「何で・・・。」

「こういう場合つて、開けてもいいんですか。」

「いや、こういったケースは初めてで、どうしたら良いか。」

「危ないものではなさそうですけど。」

「佐々木さん。そんなの、わからないですよ。」

「怖いんですか?」

佐々木は笑っていた。

「僕には妻も娘もいるんです。」

「ああ、私と同じですね。」

そういうながら、黒いガムテープをはがしてしまった。

「ちょっと・・・」

中には、小さな指輪が入っていた。

小さすぎるわりに安っぽい作りが、大人のものでは無いとすぐにわかった。

「美樹。」

箱に向かつて佐々木が呟いた。

「娘さん、ですか。」

「多分。」

優しく指輪を摘み取った。

「ああ、そうか。ママに買ってもらつたんだな。」

佐々木の目からボロボロ涙がこぼれた。

「娘が、『パパと結婚したいから結婚指輪を買って欲しい』って。でも、これってお菓子のおまけについてるんですよ。だから、気安く買つてあげるって言つちゃつたんですね。ふふ、私が買わなかつたから妻に買つてもらつたみたいで。その指輪を送りつけて来るなんて、どうこうつもうりなんだろ。」

「それは。」

自分にはわからない。  
けど。

「死んじやあ、娘さんが本当に結婚するとき、そばにいられない  
ですよ。」

「ああ。」

佐々木は大事そうに指輪を握り締めながら、床に崩れ落ちた。  
サインは貰つたので、部屋を立ち去る。

「すまんね、兄ちゃん。」

ドアの前で大家さんが入れ歯を光らせた。

誰だ、箱を受け取った配達人は。  
面倒臭いことを。

トラックに戻つて、受け取り担当者を確認する。  
「まったく面倒くせえことすんなよな。」

運転席に座つて、ポケットから煙草を取り出す。  
いつか必ずクビにさせるぞ、この黒崎とか言つ男。  
口から吐き出す煙が景色を遮断する。  
視界が真っ白になつてゆく。

全く面倒臭い。

どかどかと、廊下を歩く音がする。

「チッ」と、舌打ちが聞こえた。灰皿に煙草を押し付け、足早に部屋を出ようとする黒崎を止めたのは、彼より三年先輩の長沼という男だった。

「おい。今、明らかに俺を避けようとしたよな。」

「えー。そんなわけ無いじゃないですかあ・・・先輩。」

長沼は、携帯をいじりながら写真画像を黒崎に見せた。

「な、見ろよ。昨日の運動会。」

「わー。めっちゃかわいいー。ほんま、かわいいーわ。先輩のお子さんって・・・。」

「・・・だろ。」

どんだけ親バカなんや、このオッサンは。と言いたいのを我慢して、黒崎は笑顔を取り繕つた。もう、何回見せられただろう。愛娘の写真、この前は動画も見たなあ。といライライしてきたので、新しい煙草を取り出した。

「それで、未だに結婚相手はお父さんなんですか。」

「当たり前だろ。一生言わせてやる。」

「そら、無理です。」

「なんやてえ。」

「ちょっとー!」

黒崎が、長沼を睨んだ。

「下手な関西弁は使わんといて下さい。」

関西人はなんでこうも、方言に厳しいんだろうと長沼は思つた。後輩のくせに鼻をフンッと鳴らして怒る、アイツ本気で怒つてる。

「それはそうと、今年もきましたねえ。」

「うん。早く終わらせたいもんだ。」

「俺は、別に、家帰つても待つてる女はいないんで。ええですけ

ど。

「お前、また別れたのか。まあ、俺には関係ないから……どりでも良いけど……なあ。」

黒崎の吐いた白い煙が、蜘蛛の糸のみたいに部屋に張り巡らされるのを、愛しい者でも見る目つきで長沼は追つた。白煙を出した張本人は、次の獲物を待つているかの様だ。

「それで、年末には何箱くらいになりそなんなんです。」

「聞いた話によると、三千万個らしいな。」

「げえつ。」

「ま、毎年こんな物だな。年間の四割は師走だから。」

「だからって、思い出したように黒箱を送るのは止めてほしいですわ。一年間たまつたストレスを紅白歌合戦見ながら、もしくは行く年来る年・・・あ、もちろん俺は笑つてはいけないを見ますけどね。みんな年越すときはスッキリしてたいんかなあ。」

「心の大掃除だな。」

ふんっと鼻息が聞こえたので、黒崎がニヤリと笑う。

「先輩、今ちょっと自分で言つてみて、臭い台詞言つても一たなつて思つたでしょ。」

長沼が、ごじごし鼻を擦つた。

「俺には、理解できぬけどな。年賀状を送つてる相手に黒箱をしたためてたりするんだろ。」

皮肉っぽく、悪意のある言い方に、黒崎は目を見開いた。

「うつそお。」

その声は黒崎の物ではなく、色で塗つならピンク色の女の子の声だった。

「先輩は、結構純粋なんですねえ。見た目はトラックの運ちゃんみたいですけどお。」

「うるせえ。じゃあ、お前はそれをやつてるつて事だな、タマ。タマと呼ばれたのは、長谷川珠子という黒崎の同期だ。」

「私はやつてませんよお。黒崎君が送つてたんですねー。」

「は、どういたるか。」

「いややー。」

「せやから、下手な関西弁は・・・。」

「ううう声を鳴らしながら、珠子が逃げてゆく。  
長沼が苦笑した。

「もつと仲良くしろよ。」

「これが精一杯です。」

煙をはらいながら、長沼が立ち上がる。

「じゃあ、お先に。」

「おつかれさまです。」

一人になつた喫煙室で、黒崎はメールを打つ。電話帳の中で、先頭にリンゴの絵文字をつけている名前が彼の寂しさを埋める相手だ。一人の名前を選んだ後、数分間はその細長い指を携帯で遊ばせた。ぱちんと音が鳴ると、ゆっくりと立ち上がって、伸びをする。

「先輩に送つたなんて言われへんしなあ。」

ぱりぱり頭を搔きながら、廊下を歩く。黒い影が床に伸びて、伴侶のようにぴつたりと足に引っ付いていく。

「だつて去年いっぱい怒られてんもん。」

そう呴いた声は、まるで拗ねた子供のようだった。

「こんにちは、黒箱配達局です。」

ドアを開けると、子リストのような若い女性が立っていた。

「山崎直人さんですね。お電話ありがとうございます。」

まつ黒の作業服の旨ポケットには『黒箱配達局 長谷川珠子』と刺繡されている。ズボンにはジャージみたいなピンクのラインが入つていて、目がチカチカした。

「ど、ど、どうだ。汚い部屋ですけど。」

「お邪魔しますね。」

まつ黒なスニーカーを脱ぐと、靴下までもが黒で統一してあるのに驚いた。こんなところまで税金が使われているんだなあと思うと、少し国に腹が立つたが、女性を部屋に入れるのは久しぶりだったのでも、あわてて雑誌や食器やらを片付るのに必死になつた。

「かまいませんよ、仕事が終わればすぐに退きますので。」「す、すいません。」

ぼりぼりと頭をかいて、押入れからまつ黒な箱を取り出す。飲みかけのコーヒー や消しゴムのカスが散らばっているのを手で払いながらテーブルに置いた。

「これで、いいんですね。」

「はい。」

子リストのような配達員がウエストポーチから一枚の紙を差し出した。

「では、こちらの配達伝票に山崎様のお名前と住所と電話番号、お送り先の方の名前と住所を『記入ください。』

「わ、わかりました。」

ボールペンの字が、どんどん汚くなつていいく。いつものように細くて小さい字が、荒れて枠をはみ出すくらいの大きい字になつていく。

当たり前だ。

送る相手は、憎い相手なんだから。

林 高志

俺の幼馴染だ。

「『記入いただけましたか？』

「あつ。は、はい。」

慌ててボールペンを返す。

「では、箱に何も入っていないか、確認しますね。みかん箱より一回りくらい小さい箱、配達員が逆さを向けたり手を突っ込んだりして箱が空なのをたしかめる。

「な、なんで、空じゃないと、いけないんですか。」

「そうですねえ。『くたまにですが、困ったお客様がいて、危険物を入れようとする方がおられるんですよ～。超小型爆弾とかじやないですけど、リアルに剃刀とか・・・。』配達人がさらっと言った。

「『怖いですね。』

「まあ、それだけ恨みも深いわけでえ、だから黒箱を『利用されるわけですから。』

「なるほど。」

「あ。どうぞ、封して下さい。」

配達員がまつ黒なガムテープを出した。どこまで黒で徹底しているんだろう。

綺麗にガムテープが貼れなくて手こずっていると、配達人が箱を支えてくれた。

「あ、ありがとうございます。」

「もしかして、山崎さんはあ黒箱を初めて送られるんですか。」

「え、ええ。」

馬鹿にされてるのかなあと、少し嫌な気分になった。

「黒箱って結構利用されてるんですか。」

「年間、国民の四十パーセントが利用しています。」

おーくせんまん

おーくせんまん

頭の中で歌が回った。

つて、ことは。

「大体、九千五百万人くらいですねえ。」

多いな。

黒箱のシステムが始まつたとき、国民は怒り狂つたはずだつた。

『年一回、嫌いな相手に、まつ黒な箱を送りつけることが出来る』

なんて。

非道徳的だ。

新しい犯罪だ。

国民のストレスを軽減する方法だと？

自殺者を減らすどころか、増えるに決まつてゐる。

だれが、

だれが、そんな箱を送るつて言つんだ。

結果がこれだ。

人間は汚い生き物だと証明する結果になつた。

そして、自分も今、黒箱を送ろうとしている。

「ぼ、僕は、悪い事をしてるんでしょうか。」

配達人は、一瞬複雑な顔をしたが、笑顔を取り戻して。

「国では、認められています。」と、だけ言つた。

国で認められていればいいんだろうか。送られた相手が嫌な顔をするのをわかつてゐるのに、それでも法律で許されるからと自分を肯定しようとしている。複雑な気分だった。さつきまであんなに高志のことが憎くてしょうが無かつたのに、とても申し訳ない気持ちになつてゐる。

「本当は、すごくいい奴なんです。」

「いい人なのに、黒箱を送られるんですか。」

高志と僕は、幼稚園の時から一緒にいた。一人とも星が大好きですぐに仲良くなつた。よく夜中まで起きて望遠鏡を覗きあつて、いつか自分たちの名前を星につけてみたいねと笑つた。同じ夢を持つて、いつか同じ大学に入ろうとまで約束していた。高志は約束を守つたが、自分はまだ大学にすら入れていない一浪だった。高志は年に一回東京から帰ってきて一緒に星を見に行く。

それがとても辛かつた。

大学の話を聞いていると胸が痛くなつた。

本當は自分もそこにいて一緒に笑つているはずだったのに。

自分が悪いのはわかっている。

だけど、どんどん嫉妬が強くなつていく。

高志が『待つてるよ』と笑つた。

大学入試を諦めたのは今年の夏だつた。

「・・・来月、彼と会う約束をしてるんです。」

「そうですか。」

配達人は箱を抱えると、お辞儀をしてドアから出て行く。

「では、必ずお届けいたしますので。」

配達人はつこりと笑つている。

愚かな人間を笑つているのだろうか。

多分僕は、高志の前で笑顔でいられる。

満点の星空の下。

高志に送られてきた黒箱の話を聞きながら。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3571p/>

---

黒箱配達人

2010年12月21日22時23分発行